

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株)レック

小さな結婚式事業本部 課長 榎谷 育男

これからのコーディネーターについて述べるため、これからの結婚式を考察する。

近い将来、カップルに合わせた引出物のチョイス、新規顧客の初期対応、招待状の文面アレンジ、式場受付、調理、これらの業務を、人工知能を搭載したロボットが行うようになる。

オーバーな話ではない。人工知能は確実に世界を効率化、合理化しつつある。

検索エンジンのグーグルでは、2015年よりWEBページの評価に人工知能が利用されている。通販大手のアスクルが運営する通販サイトでは、人工知能がチャットで一次対応を行う。2017年1月からは、日本経済新聞の電子版で、人工知能が執筆した記事が配信され始めた。

大企業に限った話ではない。2013年の英オックスフォード大学の研究者による論文「雇用の未来」(原題 *THE FUTURE OF EMPLOYMENT*) では、米国の多くの職業が、今後10年~20年でコンピューターに代替されると予測されている。結婚式に関係しそうな職業を以下に挙げる(数字はコンピューターに代わられるパーセンテージ)。

ーレストランの料理人 96%

ー娯楽施設の案内係、チケットもぎり 96%

ー服の仕立て屋(手縫い) 84%

ーショーや舞台の衣装アテンダント 61%

働き手の減少が、この流れに拍車をかける。国立社会保障・人口問題研究所の予測では、2015年時点で全人口の60.8%を占めた生産年齢(18歳~65歳)人口は、2060年に51.6%となる(『日本の将来推計人口(平成29年推計)』中位予測)。働き手の割合が減ることは、ビジネスにおける機械労働への依存をますます強めそうだ。

そんな時代に生き残るコーディネーターには何が必要なのか。

ヒントとなる出来事がある。筆者の勤務する会社の運営式場のうち、30名も着席できない小規模店舗が、かつて都内にあった。ある日、少人数専門の式場と知らずに同店を訪問したカップルは、80名の披露宴を希望した。対応したプランナーは、徒歩数分の距離にある大手の邸宅風式場に電話で予約を入れ、自らカップルを連れていった。親切ではあるが、ビジネス上、合理的でない判断、行動だ。

ところが後日、そのカップルが自身の親族に、強くこのプランナーを推薦してくれた。仕事を超え、人として尽くした結果、人を感動させた例である。人工知能に「ビジネス上、合理的でない」判断はできるだろうか。

以上の考察から、これからのコーディネーターに必要なものは「効率や損得や会社の評価を超えて、人に尽くす能力」と考える。人間は、損得で説明できない、合理的でない、一見無駄にも思える何かを感じるからこそ、感動するのではないか。結婚式に最も必要とされるものが感動ならば、いつでも仕事を超えた対応を意識すべきだ。

残念ながら、この能力についての考察は紙幅が足りない。そもそも養えたり、誰もが身に着けられる能力かも疑問だ。それでも我々はこの力を希求しなければならない。サービス業においてこの力を捨てた時、我々は人工知能と変わらなくなるだろうから。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

マナーハウス島津重富荘
ウェディングプランナー 長友亜里沙

「ウェディングプランナーの存在意義」

先日担当した新婦が結婚式の半年前にマリッジブルーになり、結婚式を挙げたくないとお電話にて仰っていた。結婚式の日にも迫ってきていたので、おふたりのお休みがちょうど合った日にか直接お会いする時間をつくってもらったのだが、お話を伺ったところマリッジブルー以降、新郎新婦の間で極端にお話しする機会が減ってしまったとのことだった。その状況を把握し、お打合せの時間を新郎新婦が一つの目標に向かって共有できる有意義な時間にして差し上げることを私は一番の目標にした。結婚式に関する話だけではなく、どういうことをしたいのかお互いに何を考えているのかなど今の気持ちを伝えあうこの時間こそが結婚式の準備で何より大切だと思ったからだ。

だが、どうして結婚にはマリッジブルーなど心身的なストレスが伴うのだろうか。

1967年にホームズとレイによって発表された「社会的再適応評価尺度」は、愛するパートナーの死 100点を基準とし、他のストレスは何点になるのかというストレスの大きさを表しているものである。1年間に起きた出来事のストレス度合いを合算しストレス状態を測る。この点数が300点以上だと80%の割合で、200～299点だと50%の割合で近い将来健康障害が出る可能性があるそうだ。その中でも結婚は50点を、妊娠は40点、新しい家族が増えることに関しては39点となっている。結婚や出産は祝福される事だが、環境が変わるという事は新郎新婦や両家家族にとっては大変大きなストレスともなるのだ。

またそこに結婚式の準備などが入ってくると余計にストレスが増すのではないだろうか。上司への報告や配席、ゲストに合った引出物選びなど新郎新婦がしなければならないことは多岐にわたる。日常にない作業をされるのだから、相当な負担になるだろう。

ウェディングプランナーは新郎新婦に今後準備を進めていかなければならない事を的確に伝えることも大事だが、気持ちの面でのフォローをすることはそれ以上に大事だと思う。

今まで私は新たな人生のスタートである結婚という節目を心から喜んでいただきたい、おふたりらしい結婚式をプロデュースしたいという事に重点を置き新郎新婦と接してきた。しかし少なからずストレスを抱えている新郎新婦に接する機会が増えた今、私はウェディングプランナーに新郎新婦を精神的に支える能力が求められていると思う。そのために今後私は心理学やメンタルヘルスを学ぶことで新郎新婦の気持ちを汲み取り、心理的ストレスを和らげながら今まで以上にふたりらしい結婚式をプロデュースしていきたいと思う。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

KOTOWA鎌倉鶴ヶ岡会館
MICE CONCIERGE 白石 純子

温故知新～古き、新しき、そして未来へ～

私がこのブライダルの世界に従事して8年、まだ業界内では若輩者ながらブライダルの流行の変遷を肌で感じてきた。この1年はソーシャル・ネットワーキング・サイト（以下：SNS）での「写真映えするモノ・コト」が社会的に流行し、その流れはもちろん結婚式にも求められるようになってきた。

私はその流行自体には賛同するが、結婚式のそれには賛同できない。

最新の調査では、披露宴で実施した演出でここ5年の間での増加率が最も高かったのが「テーブルごとに写真撮影」の演出だった。（ゼクシイトレンド調査2016より）

新郎新婦は「SNS映えするお洒落な写真を残す」ことに夢中だ。会場装飾も流行を取り入れ、手作りも施し、列席者がそれをSNSに投稿する。

「後日の親戚談」よりも友人の「いいね」の数が新郎新婦の満足度に繋がっている世の中になってしまった気がしてならない。

私が勤める式場は50年以上続く老舗の会場である。昭和初期の婚礼写真を目にする機会があり、列席者全員が着物を装っている集合写真は圧巻ともいえた。

先日プランナーを集めて写真についてワークを行った。新郎新婦から寄せられる写真への要望が増えてきたからである。担当したお客様の写真データから好きなカットを持ち寄りプレゼンし、プランナー自身の写真提案の幅を広げる目的だった。

集められた写真は、フォトジェニックな洒落た写真もいくつかあったが、印象的だったのが「新郎新婦とゲストと一緒に写っている写真」だった。「祝辞」「乾杯」「友人スピーチ」等を務めたゲストと新郎新婦の3ショット。どこでも誰でも撮れる写真だ。

そのワーク中に同席していたカメラマンが一言発言した。「実はこの構図は他の会場では、こんなのお洒落な写真じゃないと言って、そもそも撮らせてもらえないです。」

このカメラマンの言葉に私はハッとさせられた。

結婚式の記録物は、何年後も何十年後も見返すに値する人生の宝物である。

今の新郎新婦が10年後に見返した時に感じる事は「どんなお洒落な写真か」ではなく「誰と写っている写真か」なのではないだろうか。前述の昭和初期の親族集合写真がまさにその真髄である。

しかし、事実としてそのようなベタな写真を拒む会場やプランナーも出てきてしまっている事に衝撃を覚えた。

お洒落な写真がダメだとは思わないが、結婚式の本義を残せない写真もナンセンスだと思う。

現代のコーディネーターに求められる能力は、結婚式の価値観や基礎知識をきちんと尊重・踏襲し、最新の流行を柔軟に体得しながら、結婚式当日の“総指揮”を執れるコーディネート力だと考える。

写真を例の1つに挙げたが、ブライダルを取り巻く環境は常に流行と隣り合わせだ。

若手への指導はもちろんだが、私自身も常に温故知新の気持ちを持つことを忘れないで従事したい。

新郎新婦に結婚式後の未来を伝えられるのはコーディネーターの使命の1つでもあるのだから。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株)八芳園

営業部婚礼課サブマネージャー 清水 麻耶

これからのコーディネーターには、コンサルティング能力とプレゼンテーション能力が必要であり、また、それを養う為に、お客様が準備の段階で選択したもののひとつひとつに対してきちんと意味や目的を理解すべきだと私は考えている。

インターネットやSNSが普及する中、結婚式に関する情報は良くも悪くも氾濫している。特に最近ではInstagramという、写真や動画を簡単に不特定多数に発信が出来るアプリにより、多様化している現代の結婚式のスタイルが浮き彫りになっている。

その膨大な情報によって、一部の新郎新婦が翻弄されてしまっていることに気が付いた。

先日、ある新郎新婦と打合せをしている際に新婦が突然泣き始めた。全く準備が進んでいないと仰るのである。一体何が不安なのか伺ったところ、ケーキのデザインがまだ決まっていないとのことだった。しかし、既に天井まで届くような背の高いイミテーションケーキをご注文頂いていた。

それは、新婦のご両親が結婚式を挙げた時に使用したケーキトッパーを実家で見つけたので、両親にはサプライズで当時と同じスタイルのケーキに、そのトッパーを使用したいというご希望があったからだ。その提案を初めて新婦から伺った時、新郎新婦と私の3人は、新婦のご両親様の驚く顔、喜ぶ顔を想像して胸を膨らませていた。

それが、今ケーキについて悩んでいる新婦を目の当たりにし、私も困惑した。新婦に聞いてみると、Instagramでオリジナルデザインのフレッシュケーキを用意している写真を多く目にし、その様子に焦りを感じてしまったとのことだった。

私はもう一度、なぜイミテーションケーキを注文しようと思ったのか、お二人にとってのケーキ入刀のセレモニーはどのような意味があったのか、確認をした。

それにより、新婦は自分の選択に自信を取り戻し、当日新婦両親へのイミテーションケーキのサプライズは大成功に終わった。

こちらの新婦のように、Instagramで得た情報と自分の選択が違うことで何が正しいのか分からずに、漠然とした不安を感じている新郎新婦が増えている。だが、結婚式に正解はない。新郎新婦が心込めて準備したことに対して列席者が喜んで下さり、新郎新婦にとって忘れ難い一日を創ることが出来たらそれ以上のことはない。

なぜそれを選択したのか、列席者にどう感じて欲しかったのか、新郎新婦が何を伝えたいからなのか。ひとつひとつの意味合いや目的をきちんと理解し、コーディネーターがコンサルティングをする能力、またそれを「伝える」=プレゼンテーション力、新郎新婦が自信を持って当日を迎える為に、この2つが必要であると私は考えている。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株) 出雲記念館
婚礼予約事業部チーフマネージャー 水谷亜矢子

「会話からはじまる信頼」

私の考えるこれからのコーディネーターに求められる力は、自分の所属する会社だけではなく社会全体にも目を向けられる力である。それを身に付けるためには積極的に周りの地域との関わりを持つことが大切だと考える。なぜなら、会社と地域の関係は、人と社会の関係の縮図だからである。

「ここに車を停めてくれると安心するの。ありがとうね。」「こちらこそいつもありがとうございます。」これは私の職場の近所に住む女性と交わした会話である。息子夫婦が県外で暮らしており、ご主人も早くに亡くし一人暮らしをしている彼女は、自宅の前に顔見知りの車があることで安心して暮らせると言う。私自身この言葉を聞くと役に立てたことを嬉しく思うのだが、彼女も私の車を見守ることで役に立っていると感じているようである。この交流を機に彼女が雪で困っていれば雪かきの手伝いをしたり、地域の清掃時には共に参加するようになり、地域との関わりが持てるようになった。私たちはお互いの立場に立って行動し、会話をすることで信頼関係を築き上げ自分の生活範囲を超えて助け合っているのである。社会に出ると人からの信頼が問われることになる。会社に所属する人間として、限られた範囲の信頼だけでなく地域の人からの信頼を得ることは、まさに人が社会という大きな場所で信頼を獲得することに類似しているのである。

私の勤める式場は神社が母体にあることもあり、初詣や夏祭り、また初宮参りや七五三、厄払いなど以前から地域の人たちとの交流が非常に多い。このような行事は家族や親せきだけではなく地域の人たちとも行うものである。しかし、昨今では日本の社会にことなかれ主義が浸透し、近所付き合いも希薄になっているため、日本の伝統行事を重要視しない若い世代が多いのも現実である。女性との関わりで分かるように少しの行動や会話が社会貢献に繋がることがある。地域活動への参加や関わりを通して地域のニーズを満たしていくことは地域の活性化に繋がり企業は信頼を得ることになり発展に繋がっていく。そしてこのような信頼と発展はその企業がしっかりと基盤をもって社会に定着することに繋がっていくのである。

以上のことから私の考えるコーディネーターに求められる能力は社会を広い視野で見る力である。その力は自分自身でも人間力を磨き、身に付けることもできるが、他の共同体から気づきを得ることにより磨きがかかる。経済産業省が2006年から提唱している社会人基礎力の中でも、具体的な行動の中ではじめて身に付き鍛えられるものだといっている。自分の所属する組織だけを発展させようとするのでは無く、地域の構成員として社会全体を良くしていこうという気持ちが、ブライダル業界の未来に一筋の光を差し込むことになるのである。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

ホテルメルパルク HIROSHIMA

婚礼営業グループチームリーダー 丸山かおり

「結婚式を挙げるべきか迷っています」このような新郎新婦の言葉にどういう対応が出来るのだろうか？「結婚式はするべき！」と一生懸命、式場の魅力やプラン等を伝えたところで、新郎新婦の心にどれだけ響くのだろうか。

「結婚総合意識調査 2016（リクルートブライダル総研調べ）」によると結婚式の実施率は68%（対前年▲1%）。63.5万組の夫婦が誕生したが、32%（約20.3万組）もの夫婦が結婚式をしないという選択をした。理由として挙げられていた「結婚式を行う意味がわからない」が、2年前に比べ8.5%も上昇していたのだ。

ありとあらゆる情報が流れている昨今、我々は様々な情報やトレンドに気を取られがちになり、そこに目が行き過ぎて本質を見失っているのではないだろうか。枝葉（装飾や演出等の表面的なもの）ばかりに目がいき、木の幹にあたる部分、つまり「結婚式の本質」を伝えきれていないのではないかと考える。

チャペル入場直前、目から大粒の涙を零す新婦。見ると新婦父が笑顔で見せた内ポケットの中には「満面の笑みの母の写真」があった。「安心しろ、お母さんも喜んでる！」と微笑む父。

新婦は4人姉妹の長女、幼い頃他界された母に代わり、家事・妹（学生）のお弁当作りをしていた。男手一つで家族を支えてきた父のことを想うと、妹が卒業するまで結婚は出来ないと思っていたところに妊娠が発覚。「父を一人に出来ない」という想いから結婚自体を悩んでいたのだ。結婚式を決断した理由、それは父が語る母の想いだった。

娘が父を思いやり、また父も娘を思いやる。私自身このような結婚式に携わることができ、あらためて結婚式の素晴らしさを実感することが出来た。

新郎新婦がお互いを、そして自身の家族のことを思いやるように、私たちプランナーもまたお二人、さらには家族のことまで思いやる。一緒に悩み・考え、家族のように寄り添い、心の深いところにある【本当の想い】を引き出し、形にして伝えることが極めて大切である。

結婚式は二人だけのものではない。二人を囲む沢山の人々、仲間からの祝福。そこには新郎新婦とのエピソードや思い出があり、感動・感謝の気持ちに溢れている。

結婚式の本質とは「結婚式を挙げること」ではなく、式を通じてこれまで二人が歩んで来た人生、これから歩む人生が、人と人との繋がりで出来ていることを実感すること。そこには相手を想う心があり、その想いを伝えられる場が「結婚式」なのだ。

結婚式の本質を伝えることが出来なければ、式をしない選択をされる方は増え続けるであろう。表面的なものばかりではなく、

「どうしたら、もっと素晴らしい結婚式になるのか？」

「どうしたら、もっと喜んでもらえるのか？」

「どうしたら、もっと・・・」を常に真剣に考え続け、そして結婚式本来の意味を伝えることこそが、私たちの使命である。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株)八芳園

営業部婚礼課ブライダルコーディネーター 岩本 春菜

これからのコーディネーターに求められていること。それは『フレキシビリティ』つまり『変化への対応能力』であると考えます。

なぜならば、今日の日本の結婚式は多種多様化しており、お客様が求めていることも多様化してきているからだ。結婚式を行う場所をとってみても、ホテル・結婚式場・ゲストハウスだけではなく、学校や病院など公共施設で行うことや、グランピングなど建物自体がないこともあり、実に様々である。また、同じ式場で行う結婚式でも、新郎新婦の意向によって、全く違う結婚式へと仕上がる。

様々な要望を持つお客様へ対して、同じことしかできないコーディネーターが対応しているのは、お客様の満足は得られないだろう。よって、コーディネーターもお客様の多様化に合わせて、変化への対応能力を身につけていくことが求められる。

では、変化への対応能力を養うために何を行えばよいだろうか。ここでは二点述べたい。

まず第一に『自分の中の固定概念を見直すこと』が必要である。例えば、最近見かけることが多くなったソファのみの新郎新婦席。年配の親族にとっては「メインテーブルがないことはありえない」と感じるかもしれない。しかし、その「ありえない」という固定概念を取り除くことで、ゲストとの距離を近く感じられるカジュアルウエディングができるのである。日本の伝統や、常識を重んじることももちろん大切である。しかしお客様がそれを求めている場合は、自分の中にある固定概念を見直し、場合によっては固定概念を逸脱することで、新しい結婚式ができるだろう。『固定概念を見直すこと』それが変化への対応能力を養うための一つである。

第二に必要なことは『世界の文化に触れる旅に出ること』である。コーディネーター自身が狭い世界に身を置いていては、やはり狭い視野でしか物事を捉えることができないだろう。旅に出る事によって、その国の歴史、受け継がれる文化、そして衣食住に触れることが出来る。例えば中国の文化で「敬茶」という儀式がある。中国では新郎新婦が感謝の気持ちを込めてお茶を淹れ、それを両親に捧げることで初めて、相手の両親を「お父さん・お母さん」と呼ぶことができる。「お茶を淹れるという動作」一つをとっても日本と中国では意味合いが違い、新たな発見がある。だからこそ今後は、世界の文化を積極的に体験することで、物事をまた違う角度から捉えることができるだろう。

上記2点を行うことで、これからのコーディネーターに求められる能力『フレキシビリティ』を養うことができると考える。この能力を身につけることで、多様化する結婚式、多様化する要望に応えられるコーディネーターになることができるはずだ。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株) ジョインセレモニー

営業部婚礼営業課ウェディングプランナー 松田 祥子

現代、結婚式のカスタマニーズは、住む場所や、働き方、流行やファッションによって多様化している。家にいるかのような高砂のソファーや、ドレスコードを決めてのパーティーなど、「ゲストと一緒に、より近くで」といったプログラムを希望するお客様が多い。また、最近では披露宴だけでなく、誓いの証もふたりらしいやり方で植樹をしたり、バージンロードをオリジナルでつくったりする挙式を希望するお客様も少なくない。今は SNS の普及により、さまざまな情報をすぐ入手することが出来る。会場見学前に調べ尽くし、自分のやりたいことが叶う式場かどうか、出来ることできないことは何かと細かに聞き取り、全て納得のいった上で申し込みをする傾向にある。

申し込みの段階でお客様は「自分たちらしい」結婚式を望んでいる。しかし、実際に現場で打合せを進めていくと、「自分たちらしい」結婚式が「写真栄えのする」結婚式に変わることがある。SNS 上に投稿することを前提に、アイテムを決めたり、進行を組んだりする。一生に一度の結婚式を、思い出に残るものとしてカタチにしたいと思っているが、それはお客様からの提案であり、プランナーとして受身になっていないかと感じることがある。本当にお二人に必要なもの・こと・想いを見失っていないか、それを見極め、提案する力がこれからの求められる能力だと考える。

私が住む山形県は、三世代同居率が全国でも高い順位にある。そのため、私も小さい頃は祖父母に育てられ、近所の大人たちに遊んでもらった記憶がある。その時によく見せてもらっていたのが、写真だった。祖父母の結婚式の写真を好んで見ていて、モノクロでも着物を着て写真に写る祖母は綺麗だった。そこで初めて写真で見た「むがさり行列」は今でも鮮明に覚えている。（“むがさり”とは山形の方言で花嫁や結婚式を意味する。）その時に歌われていたのが「長持唄」だった。嫁入りの日、花嫁を駕籠に乗せ、箆筒や着物などの家財道具を家族や親族総出で運び、嫁入り先まで送る時に、歌う歌だ。地域によって歌は様々あるが、花嫁を送り出す親の気持ちや、別れの思いが込められている。時代とともに結婚式の入場の際、長持入場としてあったものが、今その歌を聴くことはほとんどない。しかし、今のお客様に「長持歌」に込められた思いを話すと、ほとんどの方がこれまでの人生を振り返り、昔の話をしてくれる。

冒頭で、結婚式の多様化についてや、「自分たちらしい」結婚式について話をしたが、昔ながらに残る文化や儀式は変わらない。親の気持ちや、自分自身について振り返り、考える時間が結婚式にはあると思う。だからこそ、流行や情報に流されることなく、古き良き伝統をこれからも絶やすことなく伝えていくことが、今結婚式に携わる、私に出来ることなのではないかと考える。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、
それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

ザ マグリット
ウェディングセクション 真殿 紀子

「これからのコーディネーターに求められる能力。そのために何をすべきか。」

「Wハッピー」「おめでた婚」

いまから20年ほど前、いわゆる「できちゃった婚」のなんとなく後ろめたい思いを変化させた言葉である。今では特別珍しいことでもなく、なんの躊躇もなく「おめでとうございます」と言える。

時代とともに、「結婚の順番」というものも変化している。婚約し、結納を交わし、結婚式を上げ、新婚生活に入る。ふた昔くらい前のそんな順番も、今や人それぞれ、様々になっている。「こうしなくてはいけない」から、「そういうのもあるよね」という、そんな変化だ。それが一般的に受け入れられている。

さらに、出産後の結婚や再婚、年の差婚、晩婚、同性婚、・・・と結婚に対する考え方が多様化している。様々な結婚のカタチが受け入れられる世の中にはなってきたが、その反面、結婚に至るまでの問題も多いはずで、二人が抱えている悩みは増えてきたのではないかと思う。結婚は二人でするものだが、勝手にはできない。それぞれの「家」「家族」というものは切っても切り離せない存在だ。

たとえば「おめでた婚」が世の中に受け入れられているとしても、相手が本当にどう思っているのか、親の本音はどうか、このまま結婚してもいいのか、そして結婚式はやってもいいのか。そんな悩みを抱えている新郎新婦は多いと思う。今まで気になっていたけれど、ずっと見過ごしてきた家族の問題や二人の問題が、一気に目の前に現れてくるのが結婚だ。

私たちが扱う結婚式は、その結婚をお披露目するものになる。二人の抱えている問題が大きければ大きいほど、私たちの責任は大きい。口では言わないけれども、結婚式をきっかけに、その問題を解決したいと願っている二人もいるはずだ。

そんな悩みを解決し、二人を結婚式まで導くことができる。そんなコーディネーターがこれからは求められるのではないだろうか。

おもてなし重視、ドレスもお花も料理も大切。でも何より忘れてはいけないのは、新郎新婦が心から不安なく結婚式に臨めるようにすることである。目に見えるものだけを整えてお迎えするだけではだめだ。気持ちの部分も整えていくことが大切だ。

これは誰かに教わってできるようになることではない。難しいように感じるが、意識を変えただけでできるようになるはずだ。

「目の前の二人は、なぜ結婚式をしようと思ったのか」

この問いから目を離さずに、答えを探し続けること。どれだけ真摯にこの問いに向き合えるか。その答えが見つかったとき、はじめてドレスも料理もお花も生きてくる。

ここには年齢も経験も関係ない。二人との向き合い方を変えればよいのだ。

これができるコーディネーターが本物だと思う。私もそれを目指している。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

ホテルテラスザスクエア日立
婚礼部 主任 大越 正希

「ウェルカムスピーチ・謝辞のテンプレートってありますか？」打合せをしている中で最近耳にする機会が多々ある。今や当たり前に宴中で行っている演目であり、なぜそれを行うのかと問うと、「皆がやっているから」、「やらなきゃいけないんでしょ」、と口を揃えて言う。悪いことではないが大切なスピーチをネットで検索してただ読み上げることは果たして、意味があるのだろうか。

そのような現状に対して私たちに課せられた使命とは結婚式の知識が列席経験でしかない新郎新婦に対して結婚式の‘本質’を伝えることなのではないかと考える。

リクルートゼクシィトレンド調査によると、披露宴・披露パーティーをあげた理由として「親・親族に感謝の気持ちを伝えるため」が最も多くそれに次いで友人にも感謝を伝えたいと言う意見も多くあり、そんな中テンプレートで作成したスピーチ、或るいは謝辞で気持ちを伝えるのはカタチだけで行っているように感じとれてしまう。

ウェルカムスピーチに着目してみると、テンプレート例では「先ほど〇〇で無事に式を挙げて参りました、短い時間ですが楽しんでください」といった内容が多いが、私が思う本来の意味としては祝福しにお越しいただいたゲストに対しての感謝と、新郎新婦がどのような想いでどのようにして準備を進めてきたか、そして皆様にどのように過ごして頂きたいかということ伝える機会だと考えており、それを踏まえて考えたウェルカムスピーチこそ、ゲストの心に響くものになるのではないのではないか。

しかしながら新郎新婦自身では気付くことは難しい。例えば親御様でもご友人でも本質を教えるのは難しく、逆に煙たがられる恐れも考え得る。

それを伝える役目が私達ブライダルコーディネーターであり、新郎新婦に効果的にプレゼンする為には第一に私達が結婚式の知識を徹底的に身に付けなくてはならない。基本的なことは参考書等で学べばいいが、新郎新婦の心に響かせなくては意味が無いので日々の披露宴をただこなすだけではなく、ひとつひとつの進行を丁寧に創りあげてその時の本音を生々しく伝えてあげるのが最も効果的なのではないか。

つまり私達ブライダルコーディネーターが結婚式・披露宴においてのひとつひとつの演出の‘本質’を良く理解した上で新郎新婦の腹に落ちるまで伝え、響かせなくてはならないのである。

特別なことは無理してやらなくていい、今ある事を真剣に取り組むことが最も大切なのである。

第13回 The Master of Bridal Coordinator コンテスト 優秀論文

論文テーマ『これからのコーディネーターに求められる能力と、それを養うために自ら何をすべきかについて述べよ』

(株)レック

小さな結婚式事業本部 主任 相川由佳子

先日私の祖母が入院をし、4人部屋の病室で過ごしている。

お見舞いに何度か顔を出しているが、同じ病室のおじいさんへはどなたかがお見舞いに来られる姿は一度も見た事がない。たまたま私の来る時にタイミングが合わず知らないだけなのか、家族が遠方に住んでいるのか、結婚されているのかしてないのか全く分からない事だがふと生涯未婚の場合の姿と照らし合わせてしまった。

5人に4人は結婚をする事が当たり前だった時代から、近年未婚率が上昇している。

50歳時未婚率は今後13.2~24.7%になると仮定されている。【日本の将来推計人口（平成29年推計）より】

若い世代に関しては雇用が不安定なケースもあり、経済的な理由で結婚に踏み切れない人が増えているのではないかと感じる。

以前は入籍のみで結婚式を行わない「なし婚」層が婚姻者に対して47.8%と上昇した。

【総合ユニコム「婚礼・ブライダル施設インダストリデータ調べ」】

ブライダル業界もニーズに合うようにシンプルに家族だけで行う少人数挙式や低予算での結婚式等が増え、結婚式のスタイルが多様化し結婚式を選べる時代になった。ただ、上記のような未婚の上昇をみると結婚式の前に結婚するか自体を選べる時代になり、今後も未婚者はより増えていくのではないかと感じる。

今後コーディネーターに求められる必要な力は「結婚をするカップル待ちの接客ではない、既婚（母数）を増やす能力」だと私は考える。結婚式を挙げる可能性の方が増える事は、ブライダル業界全体の活性化につながるのには確かだと思う。その為に1つ考えられるのが出会いのきっかけ作り。「二次会へのコーディネーターの参入」である。現状、二次会は新郎新婦の友人から幹事を立てる事が多い。基本的に演出や進行・司会等はその友人へ任せっきりになる。ラフさや親しい友人だからこそ出せる雰囲気は二次会の醍醐味だが、この場には双方の友人の中の未婚者も多く集まる、絶好の出会いの機会でもある。コーディネーターが二次会もプランニングをさせてもらう事によって新郎新婦を祝う目的と共に「町婚」等のような婚活の一つの場として発展をさせる事が出来るのではないかと考える。

例えば自然に見ず知らずの男女が話す演出を設ける事、連絡先を交換しなくてはいけないゲームを組み込むなど。その後の展開は本人次第にはなるが、「ただ参加する二次会」を収穫のある時間に変える事により新郎新婦の満足度にもつながり、結果既婚を増やす活動の一つに繋がると思う。